



博麗靈夢が病に倒れた。

ひとりの「人間」の死をめぐり、幽香が、  
映姫が、紫が…藍が。それぞれの想いと  
情念を抱え、運命と相対していく。

物理反射倶楽部がお届けする今昔幻想夜和。



## 枯澁ノ花

博麗霊夢が重い病に倒れた。

人間なら誰しも病を得、死期が訪れれば死ぬ。もちろん妖怪もそれは変わらぬことだが、寿命を比較すればまったく異なる。

霊夢も平均よりやや早いものの、そのときが訪れたのではないかと人々は噂した。

その報せはただちに幻想郷をめぐり、花と共に暮らす妖怪・風見幽香のもとへも届く。

ゴシツが好きの鴉天狗があれこれと仕入れた情報を話すのを聞き流し、彼女は手ずから残雪を払い、いくつか花の苗を掘り起こしてブーケ状にすると、草原を後にした。

幽香が博麗神社を訪れると、境内には見舞いに訪れたものたちの姿。みな一様に不気げな表情をしており、霊夢の病状が推察できた。

ゆっくりとその中を歩んで行くと、屋敷の玄関には化け猫の少女がちよこんと腰掛けている。八雲藍やんらんの式神・

橙ちえんだ。彼女は慣れた様子で風見幽香と記帳に記すと

「あ、幽香もお見舞い？」

「きげんよう。その通りよ、今は大丈夫かしら」

「んんと、ちょっと待ってね」

霊夢の看病に八雲紫と藍の主従、そして橙があたっていることは聞いていた。少女は耳元に手をあてて藍と連絡を取って二言三言かわすと、幽香を見上げる。

「うん、今なら大丈夫だって」

「そう…ではお邪魔するわ」

靴を脱いで玄関を上がると、それほど広くない廊下を進む。邸内は奇妙な静けさで、まるで病棟のような雰囲気放っている。

「入るわよ」

ひんま  
襖「しにそつ言つて」

「待って、今開けるわ」

内側から声がし、数秒ほどすると襖が開かれる。中から姿を見せたのは八雲藍、奥には八雲紫、そして布団の中に霊夢。

「警戒態勢ね。これ、入れて良いものかしら」

幾重にも張り巡らされた結界。外敵からの攻撃だけでなく、無菌状態を保つためのものも多い。

幽香が差し出した植木鉢を藍はしばらく様々な角度から眺め、

「問題ないわ。どうぞお入りください」

どうも、と応えて幽香は寢室に入る。小さな庭に面した霊夢の寢室にはほどよく日の光が差し込み、淡い輝きで照らしている。平時であれば寝転んでまどろむには最適の場所だ。

「来たわよ」

「来なくて良いのに」

覗きこんだ霊夢の顔は、迷惑そうな、それでいて拒絶の色がない、いつもの表情。ただ、普段のような生気はない。

「苦しくはないのかしら」

「横になつてゐる限りは楽よ。薬のおかげでね」

藍の介添えを得て上半身を起ししながら、彼女は応える。ということは今のよ様な体勢も苦しいはずだ。だが、そういった様子を一切見せないのも彼女らしい。

「で、それは何？」

「鶏頭よ。貴方の病床に相応しいと思つた子を連れてきたの」

霊夢は大して興味を示さなかったが、幽香の意図に気づいたのか紫、続いて藍が露骨に不愉快な表情をした。

「幽香…貴方、少々趣味が悪いのではないの？」

「こめかみに指先をあてて視線を鋭く細める紫に、幽香は素知らぬ顔。むしろ、なぜその反応なのかとすら言いあげた。

「どこが。これほど素敵なお花もそうないわよ。…まあ、ここで騒いでもしょうがないことであるし。」  
言いながら、幽香は霊夢に視線を移す。「ここは霊夢の部屋だ。決めるのは最終的には全て彼女。」

「良く分からないから、受け取るわ。その庭に植えてくれる?」

「勿論。一番目立つ場所を使わせてもらうわ」

うなずくと、幽香は軒先へと出て、持ってきた鶏頭の苗を植え始めた。

「鶏頭の 十四五本も ありぬべし か…」

土を掘り起す幽香の後姿をながめて、藍はひとつの俳句を口にしていた。今、幽香が植えている鶏頭の数も大体同じくらいだろうか。

「なにその歌?」

「ああ、これはだな…」

詠み人は正岡子規。結核に苦しめられた子規は、死の床にあつて鶏頭を愛した。繰り返し俳句の題材にするだけでなく、写生もするなどその愛情は非常に深かった。

その花を死の床で苦しむ霊夢の元へ持ってきた幽香の意図はどこにあるのだろうか。紫や藍にはそれが図りかねていた。

ふたりの探るような視線を受け、背中を向けて庭にかがんだ幽香はまるで自分のことのように楽しげに口を開く。

「ねえ霊夢。夏を、夏を楽しむになさいな。赤い、本当に赤い素敵な花が咲くからね。異様な美をたたえた、それはそれは美しい花が、ね」



「まったく…何をしにきたのだから」

幽香は鶏頭を植えるときさささと帰ってしまった。興味があるのは花についてだけで、雲夢のことは気にしないとも取れるその態度に、藍はいぶかるような表情。

「この花を植える、それが目的であったということですね。道化たこと」

紫には苛立つと口調が殊更丁寧になるといふ癖がある。今も閉じた扇を口元にあてて悠然と振舞うが、瞳は笑っていない。だが、当の雲夢は

「幽香なんていつもあんなもんじゃない」

と云って気にしていない。その様子を見て、紫と藍も肩の力を抜いた。軒先を眺めれば、まだつぼみも出来ない鶏頭が、春の日差しをあびてゆっくりとゆれている。

そうして落ち着くと、また別の疑問が頭に浮かんで来た。

「彼女がこの花を植えた意味はなんだったのでしょうか…」

「分かるわけじゃないじゃない。さっき藍が言ってた歌だつて知らないのよ、私」

布団から首だけを軒先に向けた雲夢には、鶏頭が視界の中心に入っている。

太陽に向かって伸びた茎と葉は、手を広げたかのような姿。

だがそれは植物なら「くありふれたもので、特別な意味があるようには見えない。

「風見幽香の行為に深い意味を見出そうとするのは時間の無駄。意図があったとしても、分かるのは今ではないのだから」

幽香のそういった態度は今に始まったことではない。

たとえば西行寺ゆきこう幽々子ゆうゆうこや蓬萊山ほうらい輝夜かぐやといった言葉遊びを好む者たちならあるいは幽香の意図がわかるかもしれないが、パツと考えて思い浮かばないのだから、それ以上考え込むのはストレス源でしかない。

「それより霊夢、そろそろ薬を飲む時間よ。藍は白湯を」

頭を下げて台所へと向かう藍。そして霊夢は少し面倒くさそうな表情。

「もうそんな時間なの？また薬の種類増えたし、少しくらい飲まなくてもじやない…」

「だあめ。節々に激痛が走って眠ることもできなような状態になりたいの？」

「そりゃあ嫌だけど、さ」

なら文句を言わない、と紫は優しく包むように微笑んだ。